

週日の説教

金 大烈 神父 2008年9月27日(土)

《神様が私をここに遣わされた》

今日は、聖ビンセンチオ・ア・パウロ司祭の祝日です。貧しい人々のためにいろいろな奉仕団体を作り、それらの人々の助けになる一生を送った司祭です。また、修道会を建て、その精神を全世界に広めるという使命を果たした聖人でもあります。

今日の福音(ルカ 9:43b - 45)で、イエス様は「私は近いうちに苦しみを受け、十字架につけられて死ぬことになる」という目の前の話をしています。しかしその時、弟子達にはその話が分かりませんでした。そして怖くてその話について話しませんでした。

イエス様は、最初に「よく聞いてください」と言ってから「私はこのように十字架につけられて死に、3日目に復活する」という言葉を話しました。しかし、その話を聞いた弟子達には分かりませんでした。なぜ分からなかったのでしょうか。それは上の空で聞いてしまったからです。弟子達が体験したイエスという人物は、いろいろな奇跡を行う素晴らしい能力を持っていました。そして、彼らはそのイエス様に「従います」と言って自分達の人生を全てかけました。それなのにイエス様の話では、自分達が人間的な心で考えた奇跡は終わり、イエス様も死んでしまうと書いています。命がけでついて来た自分達はどうなるのか。そのようになってから一番困るのは自分達です。だから無意識的に聞き流そうとしてしまったのです。

もし、イエス様のその言葉の意味をきちんと理解しようとする心があれば、たぶんただ怖がるのではなく、未来の本当の栄光のために、自分の幸せのために、自分達も一緒に与らなければならないという心の働きが生じたのではないかと思います。しかし、その時イエス様について行った十二人の弟子達は、イエス様を裏切って売ってしまったユダも含めて、自分の人間的な価値観からイエス様について行ったのです。ですから自分の考え方と反するイエス様の言い方を受け入れることができなかったのです。

このような物語が思い浮かびます。熱心な信者がある日、貧しさによって惨めな生活をしている村を訪れました。そして、悲惨な生活をしている人々の暮らしを見て、心を痛め、祈りながら神様にこのように叫びます。「なぜあなたは、この人々に何とかしてよい生活をさせようとしなくて、このままの状態にしておかれるのでしょうか？」そのように神様を批判しました。すると、神様からの声が聞こえたそうです。「だから、私がお前を遣わしたのではないかと」。

私たちは、自分の考え方と合わない避けようとするか、逆に批判的になり、なぜ自分の考えとこんなにも違うのかと冷たい目で世の中を見ます。世の中には人間がいて、システムもあり、考えに合わないことがいろいろあります。しかし、このように自分勝手に考えても、結果的には何の役にも立ちません。イエス様について行くカトリック信者ならば、もし、正しくなくて醜い、望ましくない、と思える何かが起こったとしても、その現場に私たちが遣わされたことを意識しなければなりません。そして批判するばかりでなく、何とかそれをイエス様のみ旨に従うよい方向に変えようと努力することが大切な使命ではないかと思います。

カトリック信者は、よい姿勢を見せない人を見ると普通の人より腹が立ちやすくなります。いつも罪を犯している人は、罪を見ても敏感には心が動きません。しかし、毎日お祈りをして、ご聖体をいただき、よい生き方をしたいと祈っている私たちは、そういう生き方をしない人を見て、ひどく批判的になってしまう恐れがあります。そのような誘惑に負けないように頑張り、そういう時こそ、神様が私を必要とし、何かの道具としてここに遣わして下さったことを意識しましょう。そういう心があれば、ただ批判的な目で見るとだけでなく、困っている人々の役に立とうとする心が自然に生じるのではないかと思います。

ありがとうございました。